

科学研究費助成事業（科研費）【特別推進研究】

「デジタル研究基盤としての令和大蔵経の編纂一次世代人文学の研究基盤構築モデルの提示」

研究代表者：下田 正弘（武蔵野大学・ウェルビーイング学部・教授）

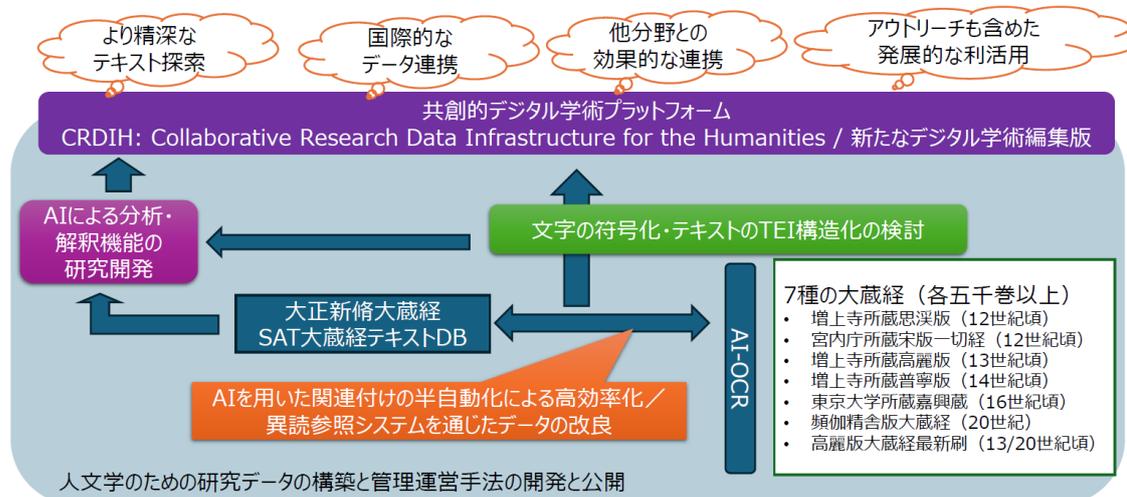
研究期間：2025 年度～2028 年度

研究の背景・目的

研究の全体像——自然科学をはじめとする諸科学は、1990 年代より急速に進展した情報通信技術（ICT）革命によって裨益され、データの収集、整理、分析から、成果の公開、交換に至る研究プロセスの全体をデジタル学術空間へと再編してきた。ところが、伝統的知の多様で複雑な形態の史資料に立脚する人文学は、この転換に種々の困難がある。この課題を解決するため、本研究は、研究媒体のデジタル化（DX）と人工知能（AI）が協働して機能する人文学の研究環境を仏教学において構築し、技術革新と協奏的に進展する人文学のモデルを提示する。

人文学の困難——人文学の営為の核心は、信頼しうる解釈を成立させる知識基盤を構築するための史資料批判にある。解釈の質を決定するこの企図は、過去から継承された知的遺産を可能なかぎり広範に精深に探查し、得られた成果を批判検討することによって実現される。しかるに、この知識は、時を経るごとに複雑化しつつ、等比級数的に増大の一途を辿っており、従来の方法を用いた人知によるのみでは、もはや対応不可能な域に達している。

ICT による令和大蔵経編纂を通じた人文学支援——これは飛躍的に進展する ICT を批判的に用いることによって解決しうる問いであり、本研究は、知識基盤のデジタル化を人文学の最先端で進めてきた仏教学分野において、その解決のモデルを示す。具体的には、国際的研究基盤となっている仏教聖典コーパス「SAT 大蔵経テキストデータ



ベース」に、あらたに開発した AI-OCR 採用の実装システムを適用し、「令和大蔵経」の編纂を可能にするウェブ学術研究基盤を構築する。一学問分野全体の学術基盤の構造改革をなすこの過程で得られる諸知見を人文学諸分野に提供し、人文学全体の DX/AI 化を支援する。

この研究が目指す到達点

成果の概要——本研究は、研究媒体のデジタル化（DX）と人工知能（AI）の関与が急速に進む新たな知識環境において人文学が成立するための要件を明らかにし、それらを満たすデジタル学術空間を構築して人文学全体の営為を発展させる道筋を示す。その概要は以下の三点となる。

(1) ウェブにおける大蔵経再編のための〈共創的デジタル学術プラットフォーム〉(Collaborative Research Data Infrastructure for the Humanities, CRDIH) の構築——1500 年を超える伝統のなかで形成された仏教聖典のコーパスを近代世界に提供した「大正新脩大蔵経」は、東洋の思想、文学、歴史研究の知識基盤として唯一無二の役割を果たしてきた。本研究は、OCR と AI の最新技術によって、一億一千万文字から成る大蔵経について、宋版、元版、明版、高麗版、宮内庁宋版等の異版間における異字を一字単位で校合し、ウェブ上の学術空間においてその改訂をなす。これは過去百年の国際学界に対する日本の貢献を未来の百年にむけて刷新する歴史的事業となる。(前頁図 1 参照。)

(2) 国際標準規格の構築と普及——デジタル学術環境にあっては、言語、制度、国、地域、研究専門分野等の相違を超えて知識を統一的フォーマットでネットワーク化する必要がある。本研究は、人文学成立の基本要素である、文字(Unicode)、テキスト(TEI)、画像(IIF)について、国際標準規格の策定に本格的に関与し、人文学全体の基盤構築と日本における人文情報学の発展に寄与する。(図 2 参照。)

(3) オープンサイエンスに即した次世代人文学研究プロセス構築と評価方法の提示——ウェブ上で構築される CRDIH は、一方で仏教学専門分野に固有の研究手法と評価に関わる学術的質を判断し、他方でその成果を人文学全体に応用的に波及させる、二つを課題とする。この両者に指針をあたえる CRDIH 編集委員会と人文学・情報学展開委員会は、仏教学の専門研究者と欧米で Digital Humanities を先導する専門家によって構成される。時間を要する伝統的人文学の成果の評価方法に加え、速報性と多様性を実現するプレプリントの理念を導入し、両者を階層化して併存させる、あらたな学術評価法を構築する。これによってオープンサイエンスという課題に人文学から応答する道を開く。(図 3 参照。)

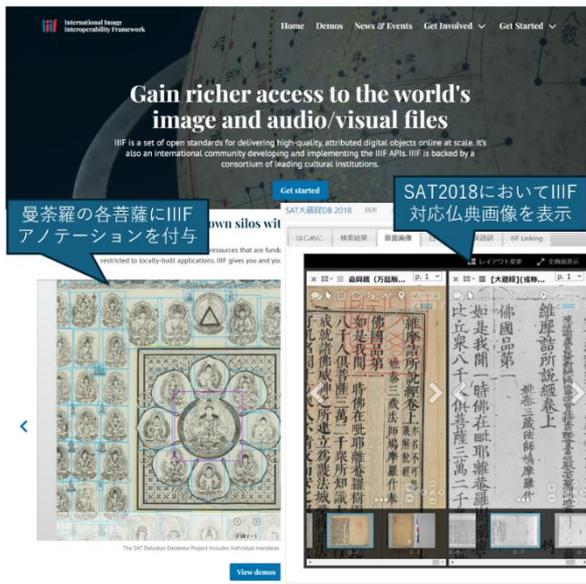


図2 国際標準規格に沿った画像公開

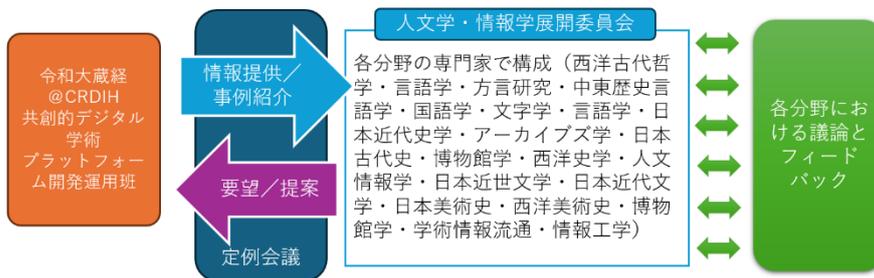


図3 人文学他分野への成果の波及を目指す体制

特別推進研究としての意義——日本は、過去から蓄積してきた世界的な歴史文化遺産を、未来の百年にむけ人類の知的営為として継承し、その意義を今後も世界に発信しうるか否かという重要な課題に直面している。それは研究の開始から遂行、評価にいたる研究プロセスの全体が関わる問いである。本研究は、この課題にひとつの学問分野全体として正面から挑み、次世代人文学研究基盤構築のモデルを具体的に提示するものである。